

国家政策とモンゴル人牧畜民の対応

モンゴル民族は、北東アジア半乾燥地のモンゴル草原で、数千年にわたって牧畜生活を営んできた。しかし近代におけるモンゴルの内・外への分離は、双方の牧畜形態・文化に大きな違いをもたらすことになった。1924年に独立したモンゴル国(外モンゴル)では、ソ連時代の集団化及び1990年代の民主化運動を経て、いまだに「伝統」的な知識を活用しながら、遊牧を行っている。一方、中国(内モンゴル)のモンゴル族は、1949年以降の集団経営を経て、国家の「定住化」政策の影響を受け、遊牧から請負牧場での畜産に転換した。

本研究会では、外モンゴルと内モンゴル、家畜の採食と排泄物に関する在来知の比較を起点として、モンゴル牧畜社会における国家政策、生業変容、環境問題を議論していきたい。

日時：2015年7月22日 15:00～17:30

場所：総合地球環境学研究所 セミナー室1・2

コメンテーター：小長谷 有紀 (人間文化研究機構 理事)

松井 健 (東京大学東洋文化研究所 名誉教授)

15:00～16:00 社会主義中国内モンゴルにおける牧畜文化の変容

包海岩 (名古屋大学大学院環境学研究科 博士研究員)

要約：内モンゴルにおける牧畜形態は、中華人民共和国の成立とともに、伝統的な遊牧から人民公社の牧畜へ変化した。牧畜の集団経営は、文化大革命(1966-1976年)大きな社会変動の影響を受けた後、1982年まで続く。その後、改革開放経済の試行錯誤を経て、市場経済的酪農型畜産へと転換した。その結果、人々の生活を支えてきた家畜利用のあり様が、大きく変化してきた。伝統的に、モンゴル族は家畜のあらゆるものを利用してきたが、市場経済のもとで、いわゆる乳や肉、皮、毛などの商品価値が高いものしか関心を持たなくなった。このような問題意識の下で、本報告では、1949年以降内モンゴルの牧畜文化変化のプロセスを報告しつつ、「商品価値」の低い畜フンなど「廃物」利用に焦点をあて、モンゴル人の視点から、家畜利用の伝統知を考察する。

16:10～17:00 モンゴル国南部の家畜飼養と採食場所の季節変化

手代木 功基 (総合地球環境学研究所 研究員)

要約：牧地をめぐる土地政策の違いは、家畜飼養の実践、すなわち当該地域の資源利用に影響を与える要因の一つである。中国内モンゴルでは牧場の請負制が実施された一方で、モンゴル国において牧地は私有化の対象から外れている。そのため、モンゴル国において

は、牧民は放牧地を選択することができ、現在でも家畜を季節的に移動させながら飼養する形態がとられている。本報告では、モンゴル国南部地域における家畜飼養の概略を紹介するとともに、採食場所や採食物の季節変化について報告する。特に草原に点在する樹木に着目し、採食資源としての樹木の役割を検討する。

17:00～17:30 **総合討論**

問い合わせ：rihn-china<@>chikyu.ac.jp 蔣